未成年者にとって「学ぶ」とは何か

――ジョン・デューイ『経験と教育』から考える教育者と未成年者の権力関係

What Does “Learning” Mean for Minors?

――Reflections on the Power Relationship Between Educators and Minors Based on John Dewey’s *Experience and Education*

○笹谷絵里[1)]・笹谷季布[2)]

Eri SASATANI, Kiho SASATANI

[1)] 特定非営利活動法人社会理論・動態研究所 [2)] 京都女子大学附属小学校

[1)] Institute of Social Theory and Dynamics [2)] EREMENTARY SCHOOL ATTACHED TO KYOTO WOMEN`S UNIVIVERSITY

Key words:教育者の経験, アカデミックハラスメント, 権力性

問題意識・目的

アカデミックハラスメントやパワーハラスメントは、大学生・大学院生など、成人の学生と教員との関係を中心に議論されることが多い。しかし、初等・中等教育においても、教員と未成年者との間には権力の非対称性が存在する。未成年者は教育を受ける立場にあると同時に、自らの経験を通して考え、判断し、学ぶ主体でもある。それにもかかわらず、教員からの不適切な言動や権力行使について、未成年者自身の視点から問題が提起される機会は十分に確保されているだろうか。

本発表では、ジョン・デューイの『経験と教育』を取り上げ、教育者と未成年者の関係性、および未成年者の学習主体性について考察する。特に、成人を対象としたアカデミックハラスメントやパワーハラスメントの議論を、未成年者と教員との関係にまで広げて捉え直すことを目的とする。

理論的背景と当事者の視点

デューイは『経験と教育』において、伝統的教育における知識の一方的な伝達や押しつけを批判し、経験を通じた学びの重要性を論じている。また、経験は個人の内部で完結するものではなく、他者との相互作用や社会的な環境によって形成されると捉えている。

発表者自身の経験から、未成年者を未熟な存在として扱うのではなく、一人の人間として向き合い、言葉だけでなく行動によって応えてくれた教育者の存在が、学びにとって重要であると感じている。一方で、教育者自身の経験は、本当に教育者として適切な経験なのだろうかという疑問も生じる。教育者も一人の人間であり、経験を積んでいるという事実だけでは、その指導の正当性は保証されない。自らの経験の未熟さや問題点を省察できない教育者が、未成年者に対して一方的に指導することは、学びを阻害する可能性があると考える。

さらに、経験は教育者から一方的に与えられるものではなく、未成年者同士の相互作用によっても生成される。教育者には、その相互作用を見守り、醸成する役割が求められるのではないだろうか。本発表では、発表者自身の当事者系経験を事例に教育者の与える影響や権力性を明らかにしたい。

考察

教育者と未成年者との間には、指導や評価を行う側と、それを受ける側という権力の非対称性が存在する。その関係性の中で、教育者による一方的な価値観の押しつけや、未成年者の人格・主体性を損なう言動が生じた場合、それは単なる指導上の問題にとどまらず、ハラスメントの問題としても検討される必要がある。しかし、未成年者は教育者に対して異議を申し立てることが難しく、自身が経験した不適切な言動を問題として認識したり、周囲に伝えたりすることも容易ではない。このことが、未成年者に対する教員のハラスメントを不可視化させている可能性がある。この問題は教育現場に限らず、援助する側と援助される側との関係にも共通する。専門性や経験を持つ側が自らの立場を絶対視せず、相手の主体性を尊重し、自らの実践を省察することが求められる。

結論・今後の課題

本発表では、一人の当事者として、自身の経験とデューイの教育哲学を手がかりに、未成年者を教育の客体ではなく、経験を生成する主体として捉える視点を提示する。『経験と教育』において、デューイが提起した教育への問いは、現在の教育現場においても十分に解決されているとは言い難い。教育者は未成年者の声に向き合い、自らの経験と権力行使を省察できているだろうか。

「学ぶ」とは何かという問いは、未成年者だけに向けられるものではない。教育者や対人援助職自身にも向けられるべき問いであると考える。

参考文献

ジョン・デューイ（市村尚久訳）(2004)『経験と教育』講談社